



日本ボーイスカウト川崎地区協議会 川崎スカウトクラブ

目次

|                  |      |            |      |
|------------------|------|------------|------|
| お正月について          | 1    | ジャンボリー物語   | 5    |
| B-P 卿から受け継いでいること | 2    | わが町をより住み易く | 6    |
| 地図ってこんなことも有るか    | 3, 4 | 活動報告       | 7, 8 |
| 赤色立体地図とは         | 4    | 編集後記       | 8    |

【お正月について】

会長 谷本 通安

今、地球が悲鳴を上げている。世界が日本が大きな転換期を迎えていると言っても過言でない。これから先が不安で仕方がない。未来に希望が持てないと感じている人が増加しているのが実情でないでしょうか。

昨年元日に発生して、今なお復旧・復興が儘ならない能登半島に思いを馳せれば心が痛みます。

我々はこの国に生まれた「地命」があり、こう生きたいと思う「我命」があります。令和7(2025)年は巳年でも60年に一度「乙巳・きのとみ」で、1380年前乙巳の年、645年に起きた「乙巳(いっし)の変」から始まった一連の日本の改革が「大化の改新」で、その年の元号が「大化」になる。お正月(16世紀に中国から百済を経由して日本へ、一年の最初の月のこと)は、厳粛な神祭りで、その年の全ての物を宿し、生み育む力を賜る為の大切なお祝いの一日です。この様に長い歴史を経て生まれた年中行事は生活の中で培われた知恵の結晶で、人生の節目には成長に応じて健康を喜び、幸せを願う様々な儀式があり、その伝統的習慣、日本文化(門松・注連飾り・鏡餅・若水汲み・御節料理等々)が失われるのではと危惧の念を抱いている(私だけか)。

世界各地で、宗教・民族・資源等を巡って紛争が絶えず、多くの難民が発生している現状を目の当たりにし、科学や技術が進歩するのに、人間の性なのか墮落なのか、心の革新で何とかならないのか悩みは尽きませんが、明るい話題やニュースが多くなるよう、年始恒例の初詣(元旦にお参りする形は明治以降で年籠(ごもこも)りに、氏神様をお参りし、沢山の人に「おめでとうございます」と挨拶を交わしては如何でしょうか(「おめでとう」には厳しい冬の中でも無事に新年を迎えられたこと、そうしてお互いにめでたく歳を重ねられたお祝いの意味が含まれています)

これからも、しきたりに「日本の心」を途絶えさせないで、日々の生活に取り入れて、この国に生まれたことを、祝福と感謝の言葉で新しい一年を言祝ぎ、本年も元気で楽しく活動を致しましょう。

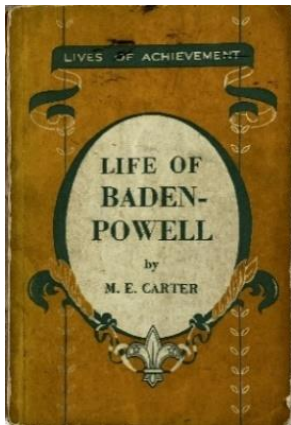


## 「ベーデン・パウエル卿から受け継いでいること」

稲葉 正明

ベーデン・パウエル卿(Sir Baden-Powell, 以下 B.P 卿)は英語圏の人にどのように理解されているだろうか? LONGMANS 社が発行した Lives of Achievement (世界の偉人たち) というシリーズ本の 1 冊に[LIFE OF BADEN-POWELL(著者: M. E. Carter (1956 年発行))]がある。

このシリーズ本では年代の違いはあるものの B.P 卿の他に Louis Pasteur, Captain Scott, Franklin Roosevelt, Madame Curie, Marco Polo, Helen Keller, Thomas Edison など、その名前を知らない人はいないだ



ろうと思われる世界の偉人が取りあげられており、ボーイスカウト運動の創始者、B.P 卿が英語圏の人々にどのように年理解されているのかを感じることができる。スカウト運動についての紹介は、1907 年 (118 年

前) 8 月 1 日から 8 日に行われたイギリス南部ブラウンシー島の実験キャンプから始まるが、1913 年 7 月に英国のバーミンガムで開催されたインターナショナル・スカウトキャンプがラリーと名付けられ、1920 年 7 月に英国のリッチモンドパークで開催されたキャンプは世界 21 か国・地域から 6,000 人のスカウト、リーダーが参加し、祭典としてのにぎやかさも表すためにジャンボリーという名称に変わったことが記述されている。

1924 年にはロンドン郊外のウェンブリー地区でジャンボリーが開催され、英国および海外から 2,800 人のスカウト、リーダーが参加したが、当時の英国領であったアフリカの国々からの参加者の中には B.P 卿がゴールドコーストで共に戦った、あるいは敵対した人々の息子たちも数多く含まれていたことが書かれていて、印象深い。ウェンブリーのジャンボリーは大成功だったが B.P 卿が最も喜んだのは、スカウトがキャンプ中の規律

を自ら定め、守り続けることにより、スカウト運動の理想を体現していたことだった。

一方、キャンプ中のイベントでは、国ごとの代表スカウトがエキサイティングな競技を展開したが、他の競技者を負かすために国を代表して激しい闘志を燃やすような場面もあり、そのような競技はスカウト運動の理想にはそぐわないのではないかと指摘を受けて、その後のプログラムでは採用されなくなったことも述べられている。平和な世界を希求した B.P 卿は、ジャンボリーでの素晴らしい経験を毎年続けられないかと強く望んでいたが、その思いは 1923 年にスイス ベルン州のカンデルステーク (Kandersteg) に開設された国際スカウトセンター (KISC: Kandersteg International Scout Center) によって実現されている。KISC の活動は You Tube などでも知ることができるが、不思議なことにスタッフ全員がピンク色のシャツを着ていて、自らをピンキー (pinkie) と呼んでいるのである。



<https://www.youtube.com/watch?v=cqJVNsqQFHw>

何故ピンクなのか? YouTube では “1989 年までは、毎年違う色を選んで着ていたが、ピンクという色はどの国旗にも使われておらず、特定の国を代表しないのでフェア (fair) だからピンク色で通すことにした、” と説明されている。この発想は、1924 年ウェンブリーで開催されたジャンボリーにおける、“国を代表して競争するのはスカウト運動の理想にそぐわない” という理解に通じる。そして、スカウトがキャンプ中の規律を自ら定め、守ったことの好例でもある。もし、B.P 卿が KISC でキャンプスタッフに迎えられたら、グッジョブ! と言って喜んでもらえたことだろう。



<https://www.youtube.com/watch?v=x3woq4CFKig>

## [地図ってこんなこともあるのか]

小川 芳郎

地図にはお世話になってきたが、知らないことばかりだ。地図学という学問があることも、「地図は意外とウソつき」遠藤宏之著で知った。この本を読んで興味を得たことを記してみた。

1. 地図は三角点などの基準点を起点として1000m上空からの航空写真に写された地物を描いていく。

15cm四方の三角点はほとんど見えないので、板を十文字に渡して位置が分かるようにした。航空写真でわからない地物については現地調査を行うのが基本だが、実際問題としてすべての登山道を踏破することは現実的ではない。実は地形図の登山道には間違いも多かった。

よくある間違いとしてはピーク（山頂）を巻いている登山道を、ピーク上を通して描いているというケースがある。写真測量で図化を担当する技術者は、航空写真で見えない部分を、見えている部分を補完する形をつないでいく。その際に、登山道の多くは尾根を走るという「経験」から見えない徒歩道は尾根を通してしまうことが多かった。従来地図で地形を表現するには、等高線で表現することが一般的な方法だった。等高線が密になっていけば急斜面、疎になっていけば緩斜面。尾根と谷の見分け方など、山登りに親しんでいる人にとっては馴染みの等高線の読図も、慣れていない人にとっては難易度が高い。しかし近年の地図では等高線を読めずとも、直感的に地形を感じられる地形表現が用いられている。

航空レーザー測量で高さを求められるようになったらである。2000年代に入ると「赤色立体地図」など

が登場した。

2. 山では登山地形図・コンパスを携帯のうえ、登山地図アプリを活用すれば万全ということになる。とはいえ登山用地図アプリにも欠点はある。一つはバッテリーの問題だ。地図データをダウンロードして、使用中はオフラインにしていたとしても、GPS機能を常時使うことである程度バッテリーは消耗する。モバイルバッテリーを持参することになるとしても、やはり不安はある。

3. 古くなった地図は無用の長物かというところでもない。地図は時間のある一点で止めて、その瞬間の実世界の状態を描いているのだ。当時の市街地や農村などの植生も含めた景況を知ることができる貴重な資料となっている。4. 現在の測量の主流はGPS測量に変わってきている。こちらは位置を求めたい場所に機器を設置して、衛星の電波を受信して直接座標を決定する方法で、地球上の絶対値を求めるというアプローチである。GPSから送られてくる位置情報は、米国が構築した「WGS84」という地球の表面をモデル化した回転楕円体に基づいた測地系が利用されている。我が国もこれに変えた。従来の日本のベッセル楕円体を基準にした測地系とは場所によっては北西方向へ約450mずれることになったからである。民間で整備されている地図データベースも、多くは国土地理院の2万5000分の1地形図を基に作成されており、誤差もそれに準拠することになる。私たちがGPSで得られる位置情報は地球上の絶対座標なのに対して、日本列島は大陸プレート上を日々ほんのわずかに動いている。このわずかなずれが蓄積していくといずれ地図とは合わなくなる運命にある。そこで、基準日として定められている1997年1月1日（元期とする）の値まで戻す処理により補正を行なっている。

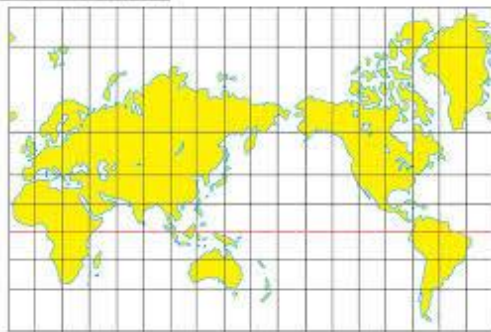
5. 地図に描かれている注記の採用基準は定められており、河川については「主要なものについて名称を注記する」、道路については「高速道路、有料道路、専用道路、主な街道等」、鉄道は「全て注記する」、建物は「著名なもの又は地域の状況を表現するために必要なものについ



て、名称を注記する」など、項目ごとに採用基準が異なる。2万5000分の1地形図では記号と注記の併記は行わない。明治神宮は「神社」なので本来なら記号対象だが、注記を表示しているため神社記号は置かれていない。そして、注記の存在はデジタル地図には不都合なのである。デジタル地図ではすべての“地”物が地理座標を持っている。地理座標は現実世界と地図を結びつけるキーであり、地理座標を持っているからこそ、さまざまなデータを重ね合わせることも可能になるのだ。

6. 1990年代からインターネットが普及するとウェブ地図が登場した。この普及に貢献したのがメルカトル図法なのだ。

メルカトル図法



世界を四角形の中で表現できるということである。地図を正方形のタイルに分割してスクロールした際に必要な範囲のタイルを読み込むという方法だ。

デジタル地図の中でGoogle Mapsのタイル分割は全世界が1枚のタイルに収まるズームレベル0から4分割したタイルがズームレベル2というようにレベルが上がる。

ちなみに私が表示されたレベル1の縮尺を見たところ500kmであったズームをどんどん拡大して約30レベルまでズームしていった最後の縮尺は6mだった。

自宅の輪郭が現れ、スマホを持っている自分の場所が点となって5~6mの誤差で地図上に現れた。時として自分がある場所をポインターの点が正確に示しているときもある。反対に拡大していくと最後は日本列島の真中に点となって収まった。

## [赤色立体地図とは]

渡部 公

「赤色立体地図」とは、最も新しい地図として認知されているが余り知られていないと思われる。この地図の存在を大々的に紹介したのは、NHK総合TV「ブラタモリ」(平成28年(2016)10月22日放映「樹海の神秘」)で登場し、その後の「ブラタモリ」でもその他の案内に使用された。従来使われてきた地形図は平面的で等高線によって高低差を観察していたのが「赤色立体地図」は高低差が立体的に見える地図になっている。

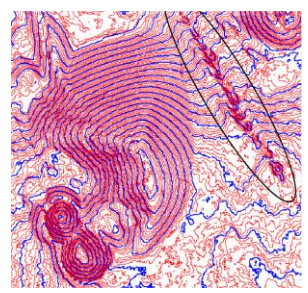
麻生区新百合丘に本社がある[アジア航測株]千葉達朗氏が平成14(2002)年に考案して特許を取得した地形の立体表現手法の一つで、傾斜量を赤色の彩度、尾根谷度を明度にして調整されていて1枚の画像で様々な地形を詳細に立体表現されている。

千葉氏の講演会で考案の経緯、航空レーザー測量図から赤色立体地図作成方法を聴講したが長い説明のため、結果の紹介にとどめ、次の機会にしたいと思う。

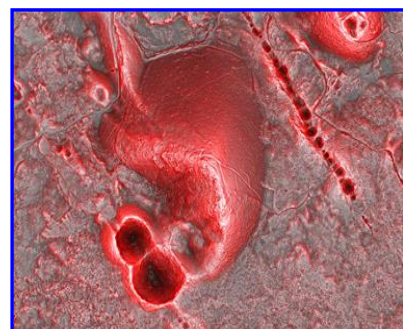
赤色にした理由は、種々の色を変えて試した結果、表現が鮮明に出たので決めたそうである。下記の写真は、富士山「青木ヶ原樹海」であり、航空レーザー測量図をベースに「赤色立体地図」が作成されている。



「従来の空中写真測量」



「航空レーザー測量」



「赤色立体地図」

(地図出典：アジア航測資料)

## [初めてのジャンボリー派遣隊隊長]

14NJ 神奈川第1隊 隊長

川崎第49団 団委員長

山川 信一

2005年秋、私はBS隊隊長として翌年夏に石川県珠洲市で開催される第14回日本ジャンボリー（以下NJ）について、自隊のスカウトに参加を促す説明をして、自分も参加の思いを固めた。

「俺も隊長として一緒に行くぞ!」と。



私の率いる神奈川第1隊は川崎21団、38団、42団、43団、48団、49団、53団、55団（各当時の団号）のスカウト32名、指導者+ベンチャー、ローバースカウト8名の合計40名の混成隊となった。

当時川崎地区の参加隊数は3個隊、いずれの隊も混成隊での参加となる。神奈川第1隊では、ベンチャー、ローバースカウトには上級班長、隊付としての活動をお願いした。

2006年2月から混成隊スタッフ会議を開催。神奈川第1隊は14NJに参加するのであって、単なる見学者にはならない事を確認し、独自のプログラム（プロジェクト）を、班単位、可能であれば個人単位で展開する事で自らが主役になることを目指す事とした。自身も個人プロジェクトを展開することとした。

14NJのテーマは「風の不思議を突っ走れ!」

- Scouts Wave 100 - だ。

能登では古く万葉の時代より海から吹く風を「あいの風」と呼び、この風が、大陸の文化や人々を珠洲の地に運び、この風によって能登の豊かな風土と独自の文化を設定されたような。

我々も「あいの風を」実感しようではないか。

“風力発電で明るいキャンプを!”

自作風力発電装置による照明設備の設置を計画した。

発電装置は中古自転車の車軸に設置されていた発電機を利用、風を受ける羽は塩ビパイプを加工し直径1.5mの風車とした。これにより、神奈川第1隊のメインゲートは、風車=風力発電装置が青空の下、力強く回り皆を出迎えるデザインが決定された。

班プロジェクトでは①「仲間づくり」サイン帖を準備、各派遣隊をめぐり記入していただく。②「一本の絆」短いロープを多数準備し、各地でロープを繋げもらい1本の長いロープを作る。③「川崎クイズ」川崎市を紹介するクイズを準備、全国のスカウトに川崎市を広く知ってもらおう。④「ドッジボール大会開催」会場でパンフを配布、サブキャンプ広場で大会を開催する。等が各所で展開され概ね成功を得た。

風力発電装置はというと、第1サブキャンプに配属された神奈川第1隊は、暴風砂林に囲まれたNJ会場とは思えぬ、とても静かなサイトが当たり、予定していた「あいの風」は何処へ。そよ風すら届かず、“回らぬ風車”となり「明るいキャンプ」は、笑いの絶えない『明るい』サイトとなった。



神奈川第1隊の皆さん、いかがでしたか。

14NJでは主役になれましたよね。



## 地域共同体と帰属意識

### —— わが町をより住み易く ——

今村 文彦

私が現役の頃、会社への帰属意識を問われることがよくあったが、視点を変えて、永年お世話になっているわが町に対して、地域への思い入れ、帰属意識みたいなものがあってもいいし、現にあるように思う。住民がお互いに支え合い協力し合う集まり「地域共同体」と帰属意識は互いに関係しあうものようだ。

今、このようなことを考えるようになったかは、この地にも半世紀になること、若い住人が増え交流が途絶えつつあること、地域共同体が崩壊してきたこと、の危機感である。



一つ

朝夕の狭い通行道路、「あのマンションの住人だな」「犬の散歩中のあそこのオヤジだな」挨拶なしに通り過ぎる。何ともやるせない。話かけようとしても瞬間背を向けて拒絶するあの元公務員だかのオヤジ、えっ何故だ一。

一つ

今年、我が家の真後ろの高齢者夫婦、奥様は命を取り留めたもの、ご主人は10日も前に亡くなっていた事件。奥様が認知症気味であったための悲惨な出来事だった。

あれもこれも地域の見守りがあれば避けられたかもしれないと。

そこで、多摩区役所の地域ケア推進課、高齢者支援課を訪ね、行政の支援策はないか、他地域のモデルとなる事例を聞いてみた。危機管理課では、防災についても聞いてみた。期待している具体策、モデル事例等はなかった。最低限必要なのは、近くの地域包括センター、自治会老人会等への顔出しをこまめにやるのが大切と改めて気づいた次第。

(Microsoft Copilot で効果的な地域活動の方法を検索した結果が次の通り。絵もその作品)



- **共同活動**：地域のイベントや祭り、清掃活動、スポーツクラブなど。
- **情報共有**：地域のニュースや重要な情報の共有。掲示板やニュースレター、SNSなど。
- **支援ネットワーク**：高齢者支援や子育て支援など、住民同士が助け合う仕組み。困った時に助け合う。
- **防災と安全**：防災訓練や防犯活動を通じて、住民の安全を守る取組も行う。

## 活動報告

### [久里浜から浦賀方面ハイク]

小川 芳郎

2024年10月16日(水)実施。計画と下見、大塚。参加者は、市野、大塚、長田、佐藤周一、佐藤道夫、百木、渡部、小川、以上8名。

行程は久里浜駅をスタートし、ペリー記念公園、平作川を渡り、久里浜海岸沿いの上り坂道から川間隧道を抜けて、西浦賀の西叶神社へ、そして、渡船場から渡船に乗り対岸の東叶神社へ参拝後、バスで浦賀駅へ。横浜駅で解散。このところのハイクでは久しぶりに10.7Kmを歩き頑張った。

ペリー記念館見学を機会に色々学ぶことができた。

2023年4月15日実施した「神奈川宿歴史の道ハイク」と結果的に連動して、より理解し易かったのだ。

江戸末期の1850年老中の阿部正弘はオランダ商館からの報告書を通じて、外国勢力が日本に迫ってくることを知った。アメリカでは北太平洋で操業する捕鯨船主らのロビー活動によって、アメリカ議会で日本を開国しろという議論が起こっていること、1852年の報告では、翌年の春以降にアメリカの蒸気軍艦がペリーに率いられ江戸にやってくる事が報告されていた。

ペリー来航の予告情報は1852年夏頃、阿部から有力譜代大名(彦根の井伊家、高松市と会津の松平家ほか)に知らされ、同年暮れには外様の雄藩である薩摩藩の島津齊彬に知らされた。幕府内部でも秘密主義がとられ、通知は奉行レベルに止められたようで、浦賀奉行所では奉行だけにしか知らされていなかった。また幕府はペリー来航の地を長崎か浦賀のいずれかと想定し、長崎を中心としていたオランダ通詞の配置を替え、浦賀奉行所の

体制を強化した。日本を捕鯨船の寄港地とするため交渉するようフィルモア米大統領の命を受けたペリー提督は、艦隊（日本では黒船と呼ばれた、蒸気外輪フリゲートのサスケハナ（旗艦）、ミシシッピ、帆船のプリマス、サラトガ）を率いて日本に向かう途中マカオではサミュエル・ウィリアムズを漢文通訳として雇い入れ、上海ではアントン・ポートマンをオランダ語通訳として雇い、フィルモア大統領親書の漢文版およびオランダ語版を作成した。1853年7月8日浦賀沖に現れた（第1回来航）ペリーは大統領の国書を渡すことが目的であることを伝えた。幕府は戦闘を避けながら艦隊の長崎回航を強く求めたが、ペリーが「要求を拒否するならば、強力な武力をもってアメリカ大統領の国書を渡すために上陸する」と回答したため、久里浜で国書を受けることを、ペリーに伝えた。7月14日、ペリーは久里浜に上陸し、急ぎ設営された応接所で、大統領の開港・通商を求める親書およびペリーの信任状と書簡を手交した。幕府側の代表は浦賀奉行であった。ペリーは翌年の再来を予告して退去した。翌年の1854年2月13日、ペリーは再び来航して（第2回来航）アメリカの国書に対する回答をどこでするかについての交渉が始まった。

ペリー側は江戸での回答を強く求め、無理ならば品川か川崎での回答を求めた。交渉は難航したが、2月27日、横浜村に決定した。その後1ヶ月に亘る条約協議が行われた。日本側の実務担当者は大学頭林復齋であった。

ペリーが英文版に署名すると、林は「我々は外国語で書かれないかなる文書にも署名することはできない」と言い、署名せずに英文版1通を返し、井戸覚弘（対島守）、井沢政義（美作守） 鶴殿長鋭（民部少輔）の応接掛3名の署名・花押のある日本語版1通を渡した。

オランダ語版は通訳森山が署名した日本のものと通訳ポートマンが署名したアメリカのものが交換され、漢文版は通訳松崎満太郎の署名・花押のある日本のものと、通訳ウィリアムズが署名したアメリカのものが交換された。双方が同じ版に署名したものは1通もなかった。

しかも、正文を何語にするかの交渉は、日米間で一度も行われず条約にも成文に関する記載が全くなかった。

全12箇条からなる日米和親条約は1854年3月31日に締結、調印された。神奈川条約（かながわ・じょうやく、英：Convention of Kanagawa）とも呼ぶ。

この条約の第11条は和文と英文では内容が異なっており、英文の第11条は開国以外の何物でもないが、和文の第11条では、幕府は開国したとは言えない。

幕府側が譲歩したのは、下田、函館の2港の開港だけであり、開国に強く反対する勢力を抑えることが出来た。

この違いは後にハリスが赴任した際に大きな外交問題に発展した。日米和親条約により初代日本領事に赴任したタウンゼント・ハリスが通商条約の締結を計画。1858年7月29日に日本とアメリカ合衆国の間で、日米修好通商条約が結ばれた。横浜が開港され、アメリカ領事館が神奈川宿にある本覚寺に置かれたことがあり、スカウトクラブの神奈川宿ハイクで訪ねた場所である。



## 〔収穫祭〕（チャックワゴンの風に乗って）

小川 芳郎

2024年10月28日（月）「川崎市黒川青少年野外活動センター」にて実施。参加者11名

当日は雨模様のため工作室を食堂に決めた。飯盒炊き、しめじ炊き込みご飯と鶏肉炒め、コーヒーを百木さん、キノコ汁を谷本さん、さつま芋壺焼きを渡部さん、ポルトガル風バカリヤウコロッケを土志田さんと、各担当のもと、他の者がそれぞれに協力する形で炊事に入った。

メスティン飯盒で作るほったらかしナポリタンは佐藤周一さんがメニューの名前どおり1人で4台を使い完成。昼食時間にそれぞれの料理が出来上がったので暖かく美味しい食事であった。例年どおり、野営場の落ち葉を掃除して感謝の中に閉会となった。





## 親睦旅行 [晩秋の箱根路へ]

佐藤 周一

11月24日(日)13時、小田原駅東口に7名集合。

箱根登山鉄道ホームには、既に外国人を含む大勢の観光客で大混雑だったが「入生田」駅で下車。県立「生命の星・地球博物館」を見学。地球の誕生から現在まで、46億年にわたる地球の歴史と生命について、化石・標本が分かり易く展示されていた。偶然にも川崎第56団池田隊長とBVS隊員が見学に来ていて真剣に展示物を見つめていた。

私達は登山電車で大平台の「対岳荘」に向かった。

夕食後、小川さんの司会で「来季の活動について」検討会を行った。翌日も好天气に恵まれて、強羅駅へ向かい、ケーブルカーを利用して早雲山から、ロープウェイに乗り換え桃源台。昼食後、芦ノ湖海賊船で元箱根港へ。

箱根神社参拝後、バスで小田原駅へ向かう予定だったが観光客が多くて渋滞が予想されるため、断念して上ってきた同じルートを使って戻った。太陽の日当たりが来た時と反対になり違った景色が見られて印象的だった。

百木さんが「箱根フリーパス」を用意して呉れたので、切符購入の長い列を横目で見ながら、とてもムーズに移動できて助かった。18時30分、小田原駅で解散した。

何処へ行っても混雑と外国人の多さに驚かされた2日間だった。



## [赤穂浪士引き上げの道をゆく]

小川 芳郎

12月24日(金)実施。参加者8名。両国駅10時出発予定が、小田急線事故のために遅れて11時に出発した。

吉良邸跡、回向院、両国橋、一之橋、赤穂義士休息の

地へと隅田川沿いに渡り、赤穂藩上屋敷跡と来て、日比谷線「築地駅」着、解散のルートを計画した。

時は元禄15年(1702)12月14日深夜、元赤穂藩浪士たちは主君・浅野内匠頭の仇である吉良上野介の屋敷に討入り、見事に打ち取った。世に知られる[赤穂浪士討入り事件]である。はたして

彼らは吉良邸から泉岳寺までの中間にある赤穂藩上屋敷まで、どのルートをとどり藩邸に入ったのか。

近くの「築地駅」まで歩く計画だったが、道を間違えて大回りをしてしまったために、時間が超過して途中の「八丁堀駅」近くで昼食をとったのが14時になった。

次の予定がある者もいたため、この場所で解散となり次の機会に、とした。



## 会員募集

当クラブは地域社会への奉仕活動、変わりゆく川崎の再発見等を講演会、見学会、ハイキングなどの活動を通して学習しながら、会員相互の親睦を図る活動を行っています。ご一緒に活動しませんか。下記へお問い合わせください。

事務局 わたなべ いさお  
渡部 公

電話：090-5499-1280

E-mail: ciao.14125@kce.biglobe.ne.jp

## 編集後記

- ・私達の活動に関連する、B-P卿について、地図を主テーマに投稿して頂きました。
- ・行事部の活動が盛んなため、活動報告が多くなりましたが、毎回、新発見があり、楽しく参加しています。
- ・タイトル写真は、躍動する“横浜みなとみらい地区”を撮影しました。
- ・新年を迎えて今年も健康管理に留意して、皆で元気に活動出来るような一年に致しましょう。

(渡部)